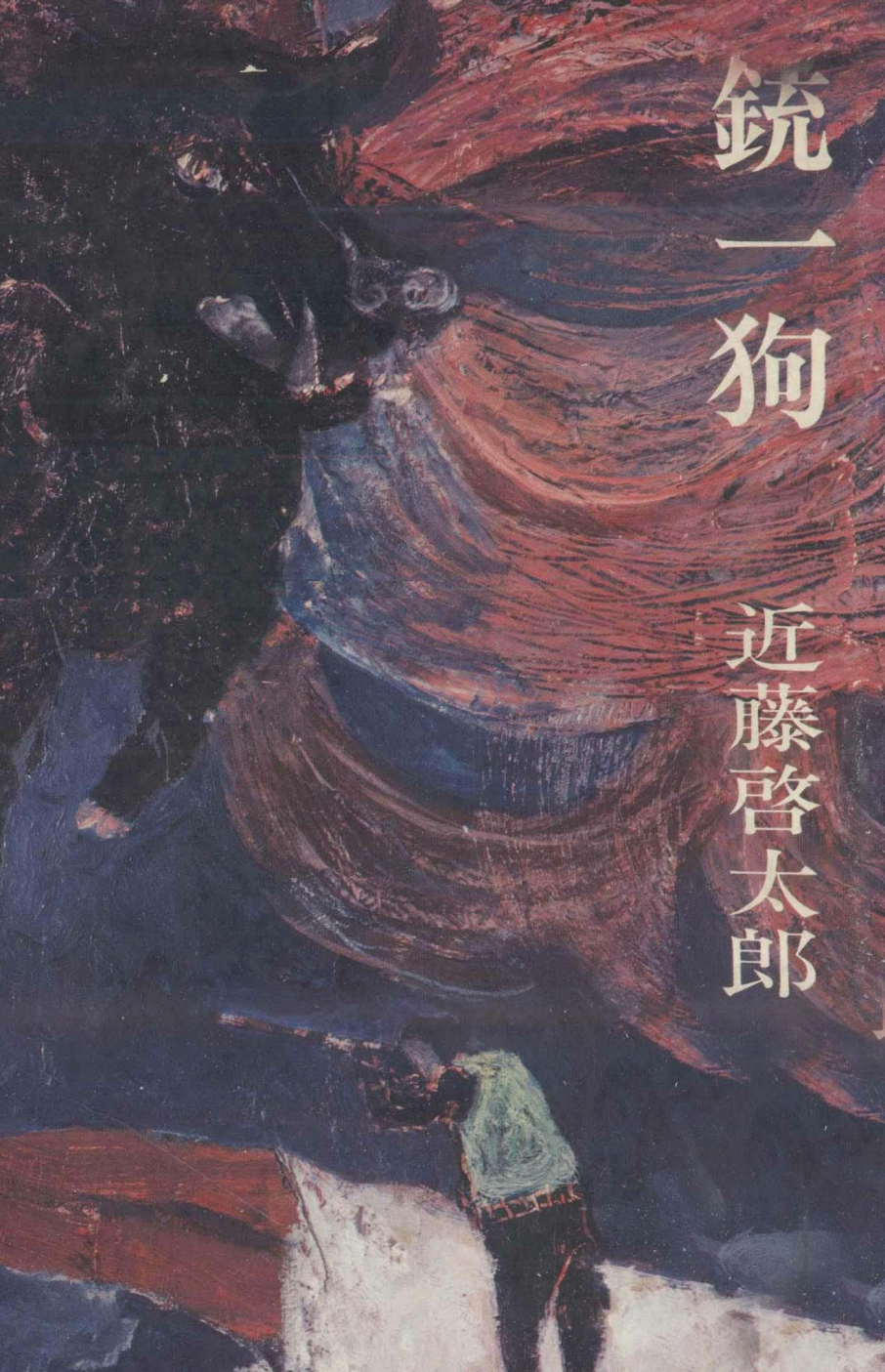
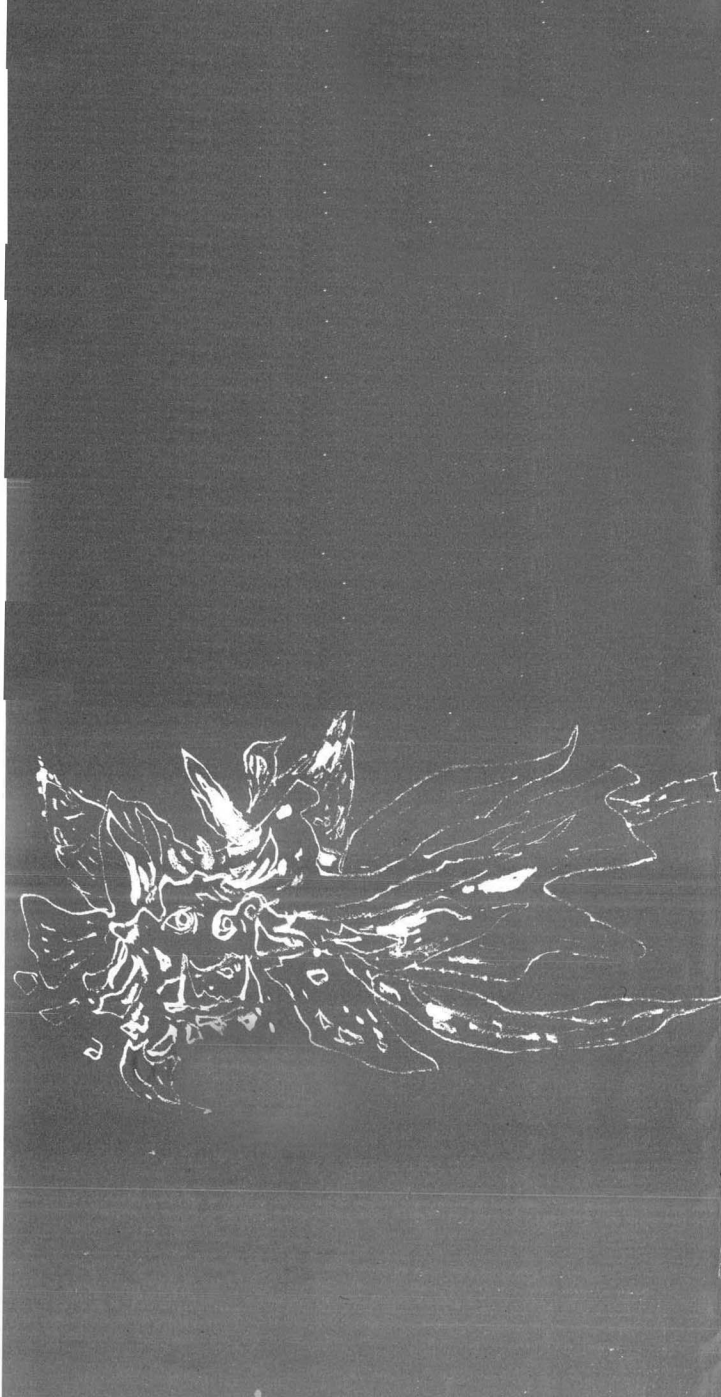

銃一狗
近藤啓太郎

一一狗

近藤啓太郎



一銃一狗

昭和四十六年十月八日　第一刷発行

著　者　近藤啓太郎
発行者　野間省一
発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽二-一二-二一
郵便番号　一一二
電話東京（945）一一一一（大代表）
振替　東京三九三〇
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　株式会社国宝社
定　価　五五〇円
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。
©　近藤啓太郎　昭和四十六年

Printed in Japan

0093-300418-2253（0）　（文2）

一銃一狗

裝幀　輪違宜和

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

一章　犬喰い

茸を採りに、寅吉は山へ出かけた。十月下旬だというのに馬鹿陽気で、一キロも歩くと、汗をかいた。

ふと、寅吉は足を止めた。蝮の臭いがする。寅吉は蝮の臭いが大嫌いだった。

栗の花の臭いに似ている。青臭くて、生臭い。青臭さと生臭さを凝縮したような臭いで、寅吉は時によると吐き気を催すことさえあった。

寅吉は臭いのする方を見た。枯落葉の多い草叢の中から、寅吉に向って鎌首を擡げ、静止している蝮が見えた。肥えて、ずんぐりとした感じの、大きな蝮だった。黒褐色の銭形の斑紋が、暗灰色の地肌に鮮かであった。

寅吉は腰の鎌を抜き取った。蝮に近づくなり、鎌をふるった。蝮は頭を一撃され、枯葉の上にとぐろを巻いた。寅吉は蝮の頭をさらに何回かたたきつづけ、のびてしまうと、首を切断した。

この秋は、蝮が多い。寅吉にしろ誰にしろ、蝮の好きな者はめったにいないが、そのくせ、村人たちは喜んでいる。蝮が多いということは、それだけ猪が少いということを物語っているからである。

猪が田畠を荒す被害に比べたら、蝮の被害などたかが知れている。いや、蝮の被害はほとんど無いと云ってもよい。村人たちは子供でも、蝮の臭いは知っている。従って、蝮に嚙まれる村人はめったにいない。蝮に嚙まれるのは、犬くらいなものだ。それも、利口な犬は嚙まれなかった。

利口な犬は蝮に出会うと、敏感に危険を察知して敬遠してしまう。が、馬鹿な犬は怯えながらも、蝮に鼻面を近づけてゆく。瞬間、蝮の鎌首が一閃し、犬は悲鳴を上げて跳び上り、飼主をたよって一目散に逃げ帰る。

「ちょっと、すみません」

この夏、寅吉が畠仕事をしていると、通りがかりの若い男に声をかけられた。

「うちの犬の顔が、河馬みたいになっちゃって、苦しそうなんです。どうしたんでしょう？　この辺に、獣医さんはいないでしょうか？」

おろおろする若い男の傍には、ボクサー種の牡犬がいた。顔はもちろんのこと、頸まで腫れ上っている。全く河馬の顔みたいに腫れ上っていて、眼も押しつぶれたようになっていた。

「蝮にやられただよ」
と寅吉は鍬を置いて、犬に近寄りながら云った。
「蝮？」
と若い男は驚いて訊き返しながら、青くなった。
「ほれ、鼻面にまだ蝮の牙が残ってるだんべえ」
寅吉は犬の鼻面から蝮の牙を抜いてやった。若い男は毒牙を見ると、いっそう青くなった。
「犬は蝮の毒に強いから、そんなに心配しなくてもいいだよ」
「助かりますか？」
「放っておいても、死ぬようなことはねえと思うけど、苦しむから、手当てをしてやるべえ」
「お願いします。すみません。これ、親類の家の大切な犬なんです」
寅吉は若い男と犬を連れて、近くの蜜柑山へ行った。
若い男はこの山村の麓の町の親類の家に東京から避暑に来ている大学生で、今日は山遊びに来たのだが、藪の中へ入って行った犬が悲鳴を上げて逃げ帰って来、それから、だんだんと顔が腫れ上ってきたのだという。
「蜜柑の落葉の下になめくじがいるから、探すだよ。黒いなめくじを探すだ。もし、なめくじが

いなかったら、町へ行って獣医をたのむより仕方がねえだんべえ」
寅吉はそう云い、大学生と一緒になって、なめくじを探した。犬は苦しそうにぐたりと腹這っていた。
「これですか？　この黒いなめくじ……」
やがて、大学生が裏返した落葉の中のなめくじを気味悪そうに指差しながら、寅吉をふりむいた。
「そうだ。それだ」
と寅吉は大学生に近寄って、すぐになめくじを手に取った。
「さあ、これで、犬も楽になるだよ。お前さんのその手拭いを裂いてくれ」
「はい、はい」
と大学生は腰の手拭いを裂いて、寅吉に渡した。
「口が開かねえから、ちっと苦しいだろうが、がまんするだ」
と云いながら、寅吉はなめくじを犬の傷口に貼りつけ、裂いた手拭いで縛りつけた。
「二、三分もすると、なめくじを貼りつけた傷口から、どんどん水が出てきて、二、三時間もすると、なめくじが溶けちまう。そのおかげで、まる一日もすると、犬の顔の腫れはひいちまうだ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

よ。放っておくと、一週間はかかるだ」
「そうですか。すみません。僕、親類の家に電話をかけて、自動車で迎えに来てもらいます。この近くに、電話はありますか」
寅吉は電話のある家への道順を教えると、また畠に戻ったのであった。
寅吉はそんなことを思い出しながら、再び山路を歩いていた。
去年の猟期に猪を獲りすぎたので、蝮が増えたに違いない。猪は皮下脂肪が厚く、蝮に噛まれても、毒のまわりが少かった。そして、少しずつ毒にやられているうちに、免疫性を持ってしまうので、猪は好んで蝮を餌にしていた。免疫性のあるせいか、猪の鼻面の干し肉を蝮の噛み傷につけると、なめくじより以上の解毒作用があるという説もある。が、寅吉はまだためしてみたことはなかった。
猪は蝮に限らず、蛇を食う。蚯蚓も、蟹も、蛙も、蛙の卵まで食うのである。いや、罠にかかった兎を食った猪もいる。貪婪な食欲である。一頭の猪が、ひと晩に三十アールの畠を荒してしまうことは珍しくなかった。
だから、百姓が猪を眼の敵にするのは無理がない。また、猟師が生活の糧のために猪を眼の敵にするのも止むを得なかった。が、都会の人が猪を眼の敵にするのはどんなものであろうか。

都会のハンターはただ興味を満すために、猪を追いまわすのだ。人間の興味のために殺戮される猪を見ていると、寅吉は哀れでならなかった。

とは云うものの、寅吉も若い頃は興味本位の猪狩りでしかなかった。正直云って、猪狩りが好きだったから、猟師になったのだ。が、年月が経つにつれ、寅吉は猪に奇妙な愛情を感じ出すようになった。田畠を掘りくり返し、犬を傷つけ、人にも襲いかかって来る猪が、追々と憎らしくなくなってきた。暴れん坊だが、猪にはたくらみがなかった。手に負えない、やんちゃ坊主に接したときのような、苦笑まじりの親愛感が感じられるのだった。

寅吉は若い頃の自分を省ると、一概に都会のハンターを非難するわけにはゆかないと思った。第一、寅吉は今でも都会のハンターの案内役を勤め、稼ぎにしているのだから皮肉だった。

もっとも、寅吉は都会のハンターに雇われているとは思っていなかった。興味本位の猪狩りの手伝いをしているとは思いたくない。寅吉の方で、その他大勢のハンターを雇って、猪狩りをしている気だった。事実また、猪山へ行けばハンターたちは寅吉の指図のままになるのであった。

長年のあいだに、寅吉はさまざまなハンターに接した。が、実業家の横川ほど気に入らぬハンターはいなかった。もう十年も前のことである。

十年前の二月初旬、横川は猪狩りにはおよそ場違いな、豪華な大型車に乗って来て、宿舎に着

くと、すぐに寅吉を呼んだ。宿舎は旧家の桃井家の離れであった。
「君が寅吉さんかね。僕が横川だ。村長から、僕のことは聞いてるだろうな」
「へい」
「代議士の山田君が、ぜひこの村へ猪狩りに来てくれと云うものだから、来てみたんだ。山田君が案内して来る筈だったが、急用が出来たので、替りに村長に僕のことを任せたっていうわけなんだよ」
　と云ってから、横川は秘書をふり向いた。
「君、村長はまだか」
「は。仕事がすみ次第、なるべく早く伺うと申しておりましたが……」
「もう一度、電話をかけて来てくれ。どうせ大した仕事もない癖に、失礼じゃないか」
　横川は悪辣（あくらつ）な乗っ取り屋として有名な五十男だが、顔だちが整っているせいか四十代に見えた。が、眼の動きの素早い、抜け目のない表情が、如何にも育ちの悪い成金という感じだった。
「猪狩りは、初めてですか？」
　と寅吉は横川に訊いた。
「初めてなんだ。僕だけじゃなく、ここにいる連中はみんな、鳥猟はかなりやったが、これからは

大物猟に転向したいと思ってるんだよ。ついでに紹介しておくが、これは僕の息子で、東大へ通っている和彦だ。そちらが、常務の梶谷君。その向うが、運転手の山下だ。山下だけは猟をやったことがないが、秘書の中村はやってるんだよ」

寅吉はひと眼見るなり、和彦は変り者だと思った。和彦は何かほかのことを考えているような顔で、そっぽを向きながら煙草を吸っていた。寅吉が挨拶をすると、気がついて和彦はあわててお辞儀を返した。横川が再び寅吉に云った。

「ところで、礼の方はどうしたらいいのかね。遠慮せんで、云ってくれ」

「獲った猪を社長さんに買ってもらいますべえ。いつも、そうしてますだよ」

「ほう。そんなことで、いいのか。で、猪は幾らかね？」

「腸抜き、一貫目、二千円ですだ。たとえば、十五貫の猪を腸抜きすると約十貫だから、二万円ていうことになりますだよ」

「ほう。それはまた安いもんだな。それだけで、いいのかね？」

「あとは、人によりますだ」

「そうか。じゃ、その点は村長にでも相談しておこう。とにかく、君も村長たちと一緒に、ここで食事をして行くといい」

「おら、けっこうです。早く寝とかんと、明日にさわりますから、これで、ごめんなさって」
と云って、寅吉はさっさと帰って来てしまった。
翌朝、寅吉は隣家の電話に呼び出された。
「さきほどから、支度してお待ちしているんですが、まだ迎えに来ていただけませんか」
と秘書が丁寧な言葉づかいながら、いささか不満そうに云った。
「こっちへ来てもらうだよ」
と云って、寅吉は電話を切った。
三十分ほどして、横川の自動車が寅吉の家の前に着いた。車から下りてきた横川に、寅吉は挨拶抜きで云った。
「その大きな車じゃ、山路は無理だんべえ。こっちの車に乗ってもらうべえ」
「この車に乗るのかね？」
と横川は眉をひそめて、ポンコツ然とした小型ライトバンと小型トラックを見てから、改めて寅吉に云った。
「この村には、小型タクシーか何か、ないのかね？」
「ありますだ。でも、そんなもの呼んでる時間が惜しいだよ。さ、早く行くべえ」

と寅吉はさっさとライトバンの助手台に乗りこんだ。

横川の息子の和彦が寅吉につづいて、その背後の座席に乗りこんだ。横川も仕方なく、和彦の隣りに乗りこんで来た。その背後には、猪犬が乗っていた。

トラックの方には助手台に常務の梶谷、秘書と運転手は二頭の猪犬がつないである荷台に乗りこんだ。

ライトバンは鉄二、トラックは定夫の運転で、猪山に向って出発した。悪路を乱暴に運転するので、馴れない者は天井に頭を打ちつけた。

「痛い！　君、もう少し気をつけて、運転が出来んか」

と横川は鉄二に叱言を云ったが、次の瞬間、悲鳴を上げて思わずふり向いた。

猪犬が横川の頸筋をなめたのである。横川がふり向くと、猪犬は熱い息を吐きかけながら、今度はいきなり顔をなめた。猪犬は年中、猪の臓腑を食っているせいか、口臭が血腥かった。

「よさんか！　よさんか！」

と横川が騒ぐと、猪犬も釣られてはしゃいで、いっそうからみついた。

「おい、寅吉さん。助けてくれ！」

「社長さんに、親愛の情を示してますだよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.